

## 初歩き

平成二十八年度 佐伯史談会初歩き

### 鶴岡方面に独歩の

### 足跡を訪ねて

一月八日、佐伯独歩の会のメンバーと佐伯史談会の会員が合同で新年の初歩きを実施しました。

今年の初歩きは、上岡の十三重の塔、鶴岡の海福禪寺、白濁の若宮八幡・白濁貝塚、岡の谷の西南の役の招魂所の四ヶ所です。参加者は二十四名でした。

国木田独歩は、ご存じのように明治二十六年九月から翌年八月まで佐伯の鶴谷学館の教師として滞在し、授業の傍ら各地を巡っています。

これは彼がキリスト教の信徒であったと言う事と、彼が崇拜するワーズワースの影響にあるといえます。ワーズワースは、十八世紀の英国ロマン派の詩人で、純朴で情熱を秘めた自然賛美の人です。英国の湖

水地方をこよなく愛し自然の奥深さに触れ、忘我の境地を詩に詠った人です。

独歩は、ワーズワースの影響からか、自然を求めて佐伯市内や周辺部を鶴谷学館の生徒達とめぐっています。

独歩の日記、「欺かざるの記」の明治二十七年一月二十一日と二月十八日の項に、

一月二十一日午後、鶴谷学校の生徒、教会の諸子十名許りと坂の浦傍に散歩す。

二月十八日、日置氏来訪、石丸の一件なり。夜学生を集めて演説する。帰路、富永方に集まり談話する。衆と共に漫歩する。午後也。

「欺かざるの記」には、場所や同行した氏名は、ほとんど書かれていません。しかし、鶴谷学館の生徒で独歩が佐伯を去り東京に戻る時共に上京し、のち東京本郷の駒込教会の牧師になる富永徳磨氏の日記には、次のように書かれています。

一月二十一日

午後より国木田兄弟、薬師寺、尾間、飯沼、山口、武石と相伴つて郊外散歩に出づ。森として並び立つ古杉の間に蔽めしくゆかしく構へられたる若宮八幡宮の前を過ぎ、白濁を通じて常磐の色は見えつつも、尚煩へる風情なる一本杉の峠に出で、坂の浦に下りぬ。

鶴岡の野はいつもながら愉快なりき。まだ、春ならねど薄かすみ模糊として野山にたなびき、茂れる小林の下に二つ三つ居並ぶ藤原村落、わざと山を切凹めて造りたらん如き山懐なる高畑の畠は、毎度なれどまた一層の快味なりき。坂の浦より葛に廻り、帰路につきぬ。田の浦民家の籬外に咲き初めてしと云はんばかりの梅の花、まだ香を散さずに映り立ち、手折らん人を待顔なるいとゆかしかり。

二月十八日

二時より家を出て国木田師が寓居坂本邸(現・国木田独歩会館)を訪え、飯沼源治、尾間明、薬師寺育造、山口有巳、田中敏一等と二、三の少年とあり。共に携えて郊外に出て、鶴岡の野を散歩しぬ。回福寺の

境内、星の宮の社頭、瓦焼く所、水干し田の上、又溝の邊まわりまわりて中野の高原を越え、廻りて分かれ帰りぬ。日はかたぶけり。夜に入りて月は冴かなり。と書かれている。

人々は独歩と共に鶴岡の地を散策し自然の優雅さ、神秘さを共有した事だろう。独歩が歩いた鶴岡の野を散策し紹介しよう。

一、九切の塔(十三重の塔)



この塔については、大正十三年(一九二四)郷土史家の佐藤蔵太郎氏の「稿本南海部郡史」に次のように

書かれています。

「鶴岡村大字稻垣字古市の山中に在り。塔は方四尺、十三層にして高さは二丈五尺余り。四面皆佛像を刻す。其の製、藤原時代以前のものなるべし。

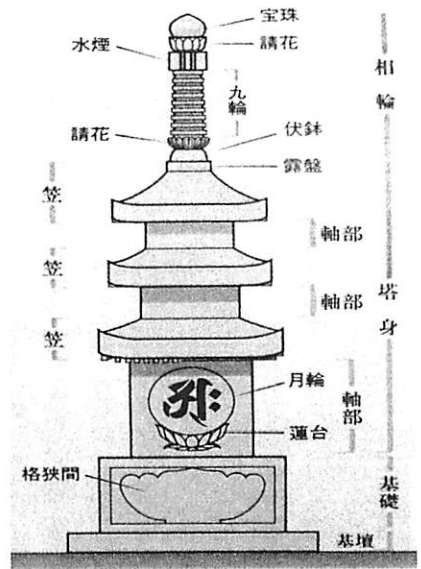
所在地の字を道成寺と言ひ、上方の山腹には長雲寺、光明寺等の遺趾あり。又、附近なる脇村の山上には一乗寺、二乗寺の跡も残れり。尚善教寺、潮谷寺二寺も古市村にありたるも、毛利氏佐伯入部後慶長年間に城下にうつしたるなり。古市は、古昔、郡領佐伯久良磨以後子孫、引き続き治所と為したる地なれば、此の塔もその当時建設されしならん。塔の建てる所は、古市村の南方、梅牟礼の山麓の丘上にして石磴三、四十段を登りたる処なり。最下層の四面に刻したる佛像は同一のものにて地藏菩薩らしく見ゆ。上蓋より三層は正形の反対となり居れり。是は地震の爲揺るぎて自然此の如くなりしとも言ひ、又、此の山中には昔時、巨大なる樹木鬱蒼と茂り居たれば、かくの如く塔上の三層が正形を變じたるは、巨木の技條が風に吹かれて、此の塔に触れ、漸次かくの如くならしめたるなりとも言えり。石

質は灰石にして下層の部分の仏像は面部を痛め所々毀損したり。是は風霜雨霧の爲にあらざるして児童の投石などの悪戯により傷つけられたるなり。年号月日の記すものなく、又建てたる人の姓名もなし。塔は東に面して西に背をしたるも、四面皆表裏の別なく同一なり。以前は香華を供したるものと見え、塔外に雨露を防ぐ小廣の礎石様のもの尚存し、附近に石灯籠の蓋部地に落ち居れば、燈明を点じたる事知るべし。

予は大正六年十一月二十九日、文学博士喜田貞吉氏と同行して此の塔を見たり。喜田博士の説によれば、「此の塔はあまり古きものにあらず。鎌倉時代以降の建設にて供養塔なり。最下部の石心には一字一石を納めあるべし」と言えり。」

(佐伯史談第四十五号)

また、佐伯史談第一六三号には宮下良明会員が「佐伯十三重の塔と中世佐伯氏」と題して寄稿しています。この中で「十三重塔格狭間」「層塔の軸部」「三尊仏の様式」と塔の形態について詳しく述べています。その一部を紹介しよう。



この十三重の塔は、石塔の中でも層塔と呼ばれる物です。通常、塔は相輪、塔身、基礎の三つの部分から成り立っています。地表や基壇と呼ばれる臺石の上に基礎を据え、軸部を置いて笠と呼ばれる屋根をかぶせていきます。最上部の屋根(笠)の上に露盤を置きます。この笠と軸部、露盤を総して塔身とよびます。

塔身の部分の数により三層、五層、七層、九層、十三層の塔が出来上がります。この上岡の塔は塔身の部分が十三あるため、「十三重の塔」と呼ばれていま

す。

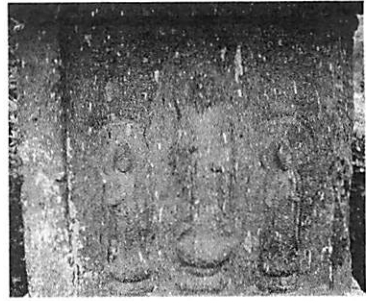
露盤の上には伏鉢、請花、九輪、水煙、請花と置き、最頂部に宝珠をのせます。この部分を「相輪」と呼びます。十三重の塔には、現在、相輪の部分がありますが、後の時代に付け加えられた物とされ、十三重の塔身のみが県の重要文化財とされています。

### 《十三重の塔格狭間》

塔の基礎上の壇には格狭間とよばれる狭間が彫られています。この格狭間は東の内側に細い線が彫り入れられており入隅形にしています。入隅形は、須弥壇や祖師像の台座に用いられる手法で豊後高田市の富貴寺の須弥壇に同じ物が見られるそうです。格狭間が富貴寺と同型のものとなれば、この十三重の塔は十二世紀後半のものといえます。

### 《層塔の軸部・三尊仏の様式》

軸部の四面に見られる三尊仏一番下の軸部には四面に三尊仏の彫刻が見られます。これは白杵の磨崖仏や菅尾の磨崖仏と同様な形式をとっています。



軸部と軸部の間は、低く造られており、部分的に黄色や朱色の部分が残されています。軸部の三尊は僅かに風化していますが、東西南北夫々に見受けられます。本来の三尊配置方式は次の通りです。

・東方―中尊薬師如来 脇侍月光菩薩 日光菩薩  
・南方―中尊釈迦如来 脇侍文殊菩薩 勢至菩薩  
・北方―中尊弥勒如来 脇侍無著菩薩 世親菩薩  
・西方―中尊阿弥陀如来 脇侍観音菩薩 勢至菩薩

この十三重の塔の三尊形式は、国東富貴寺の四面仏壁画のとおりでした。北方に位置する脇侍無著と世親は釈迦入滅後の五世紀、北インドで活躍、法相教学を確立した兄弟です。十三重の塔建立の目的は、『五十六億七千万年後、末法の廃れる頃、弥勒菩薩が現れ衆生を救う』という藤原時代の思想によるものです。

その仏教の経文、法華経の一部、如法教を写経して経筒、または壺などに入れ土中に埋め、其の上に建てるというものです。

この十三重の塔も当時の法華経信仰の影響を受けて、石に写経して基礎下に埋め其の上に塔を建て礼拝の対象とした物と考えられます。

## 二、栄谷山海福禅寺

佐伯市鶴望坂山にある臨濟宗妙心寺派のお寺で養賢寺特例地となっています。本尊は釈迦如来です。創始の年月は明らかではありませんが、開基は備叟座元（万叟和尚）と伝えられました。備叟座元が寛永二年（一六二五）九月寂とされていますから、創始は慶長・元和の頃と考えられています。平成元年（一九八八）改築の際に発見された瓦から、二百八十年前にこの地にあったことが分かりました。十九世、二十世の住職が早世したため後継の住職さんが定まらず、養賢寺の雪堂宗碩氏の紹介で中野御料さんが後を継いだそうです。



寛保・御領分中寺社記には佐伯四国八十八カ所の一寺で御詠歌には「慳けんどんと邪見の鬼に勝尾なる御寺は徳を海福かいふくの場」と書かれています。山門には、下り龍の彫刻が掛けられています。

この寺には「実体のないものを実体のあるものとして捉えたりするよう  
な思い、要するにまでもでない思いを  
起こすな。正念を起こせ」という意味  
の言葉「莫妄想ぼくもうそう」(妄想するなかれ)と書かれた額が本  
堂の中央に掲げられています。

また幕末の勤王の志士、青木猛比古あおきまほひこ(佐伯市柏江出身)が幼少の折、ここで修行したと云われています。

青木猛比古は海福寺を出た後、大坂の叔父萬冥和尚まんめいの法雲寺に寄宿し、京都の神祇伯白川資訓すけのりに任せ、宇佐・安心院・天草・小倉と北九州及び長州を舞台に草莽そうもうの志士として長州藩との連携を深めながら倒幕活動に参加しています。有名な三条実美等ざんねいの「七卿落ち」の護衛や、幕府と長州藩との戦い(第二次長州征

伐)の「小倉城の戦い」での活躍が知られています。猛比古は、倒幕活動中の慶應三年(一八六七)三月京都の三条大橋で暗殺されています。

青木猛比古の顕彰碑は、昭和初期柏江の神社境内に作られました。海福寺については独歩の日記『欺かざるの記』には見あたりません。富永徳磨とくまの日記には、『回福寺』という名前のみが書かれています。

### 三、若宮八幡社

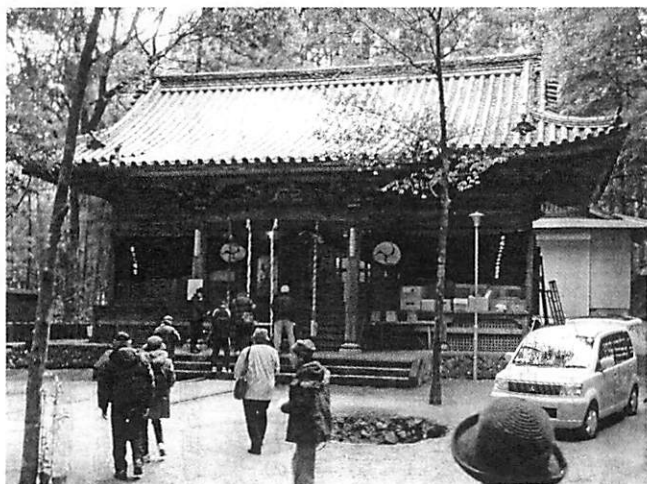
若宮八幡社は佐伯市白潟にあるため「白潟八幡宮」ともよばれています。

建久年中、佐伯荘の領主緒方三郎惟栄これよし(宇佐八幡宮焼き討ち事件にて流罪)が、上州沼田の荘(現・群馬県沼田市)より豊後國佐伯荘に赴任の途次京都男山の石清水八幡宮に参拝し、佐伯荘の鎮護の神として御分霊を請け、のち御分霊を八幡山(現・佐伯城山)の頂きに勧請、創祀し『城山八幡宮』と称したと言われています(鶴藩略史)

佐伯茶飲話には

「若宮八幡社はお城の鎮守で、白潟八幡宮と申して

藤原村より白潟に、松阪より山続き船頭町、長瀬村、蛇崎村、津志河内村までの氏神の由、八月十五日と十一月初卯の日祭禮なり。演出でも御座候て流鏝馬もこれあり候由承り伝え候」と書かれています。



若宮八幡社

佐伯莊に赴任したとされる緒方三郎惟栄は赴任する途中、杵築市山香牛屋敷にて没したとも伝えられています。杵築市山香牛屋敷の馬上八幡宮の境内には、緒方三郎惟栄を祀った「緒方大明神宮」があります。佐伯莊に赴任されたとされる緒方三郎惟栄一族がどこに在したかは不明です。

慶長九年（一六〇四）佐伯藩祖毛利高政が八幡山を築城の地と定むるにあたり、山上の神祠（八幡社）を城の西麓、白濁の地に移し城鎮守として城山八幡宮と号した。

以来、佐伯藩鎮護の神として、歴代の藩主の尊崇厚く、皆藩費を以て祭祀している。享保十三年（一七二八）、毛利氏六代高慶公は、鶴屋城の総工事竣工の祝いとして、京都吉田司家（吉田二位兼敬卿）より「若宮八幡宮」の神号を受け、城山八幡社を「若宮八幡社」と改称した、と伝えられています。この年より御神幸祭行列が行われ始めたといわれています。今年には本神社創建八二六年目にあたります。

御祭神は一の御殿 日咩大神・菅田別尊、二の御殿 帶中津日子尊、三の御殿 息長足姫命です。境

内には庚申殿、秋葉社、恵比寿社、稻荷社、水神社が祀られています。

国木田独歩は、日記「欺かざるの記」十二月二十日の項に次のように記述しています。

収二と共に散歩する。例の如く城山をめぐらんと志して行きぬ。例の八幡の社に來たり。見れば笛と太鼓の音、森の中に聞こえて二旒の旗、鳥居の外に老杉の傍らに立つを見たり。この時雨降り至り例の谷を越ゆ。雨にしめりし空氣、山谷の翠氣に合い得ならぬ香、傍らのしげみより起こりて面を拂う。雲忽ち破れて光り、箭の如く流れ下りて林谷峯にみち、雨に湿ひし樹葉俄にきらきらと輝く。かかる時に此の坂を越ゆるを得る人は、都の町を雨に追われ、て走る人にくらべて幾倍なる哉。

坂を越ゆれば例の谷間出づ。忽ち山の彼方に音す。吾の曰く啄木鳥なりと。耳をすまして聞けば、伐木丁々、山更に幽かなり。またまた光雲間より落ちて前山の半腹を流るる如く走りゆく。

（若宮八幡↓城山裏↓岡の谷）



三月二十九日

午前十一時 佐伯坂本方に帰るを得たり。佐伯に  
歸りて驚きたるは桜花満開せる事なり。麦の穂を吐  
ける事なり。思うに国許より氣候半ヶ月も速し。郵  
便を出しに行きし序に、収二を伴うて散歩を試み、  
城山の後ろをめぐり例の八幡社の幽境を探り、例の  
中の坂の静粛を呼吸し、例の招魂場の谷間に出て、  
遂に招魂場に至り桜花を称す。

四月十三日

薄暮出て散歩す。連日の雨はじめて晴れて、新月  
のひかり、ひとしおあざやかで星の光も珠に美しき  
を感じぬ。岡の谷より城山の後ろに出て、若宮八幡  
社内をすぎて杉の月を賞し、かくて直ちに教会堂に  
出席しぬ。

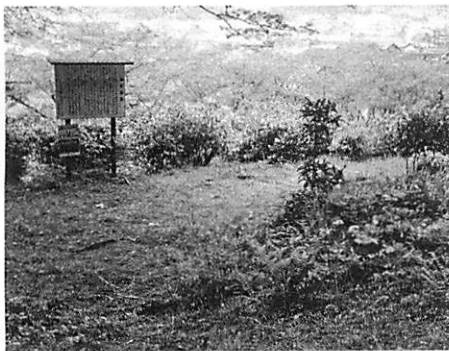
四月十八日

今宵、月光を踏み星影を仰ぎて城山の麓をまわり  
ぬ。山谷の月光、溪流の幽聲ゆうせい、老杉の莊嚴そうごん、露を帯  
び光を受けて微風にきらめく笹、古びたる神社の寂  
寥りよう幽遠、言い難き草木の香、心地よき微冷微温の氣  
候、杉などの黒々と茂れる枝のすきまより、もれ落

つる光のものすこき、凡て美ならぬはあらず。

独歩は、このように下宿の坂本邸から弟収二や鶴谷  
学館の生徒らと、養賢寺横の岡の谷から城山の裏手を  
通り、若宮八幡社まで幾度も散歩している。このコー  
スは、西谷、鶴岡地区を廻つて白濁八幡宮に進む道と  
双方あるが、西谷まわりの方が多かつたと思われる。

#### 四、白濁貝塚



この遺蹟は独歩  
がよく散歩した若  
宮八幡社の境内よ  
り昭和三十二年に  
発見されました。二  
つの貝塚と弥生時  
代中期の竪穴式住  
居跡、高床式家屋  
跡、須恵器の蔵骨器  
なども発見されま  
した。貝塚からはイ

ノシシ、鹿などの獣骨、ハマグリ、カキなどの貝類、白樫、イチイガシの実が発見されました。これらは若宮八幡の本殿の一角に展示されています。

このあたり一帯は照葉樹林が生い茂り、秋には豊かなドングリを採集して食料としていたと考えられます。

此の遺蹟から発見された口縁部に刻み目の凸帯を持つ『下城式土器(甕形土器)』は、東九州の地方色を示すものとして注目されました。弥生時代の前期末から中期における土器編年の標識となりました。

## 五、岡の谷招魂所

この岡の谷招魂所は明治十年の「西南の役」に従軍し戦病死した軍人軍夫一三四名、警察官一四名の計一四八名の墓地です。

明治十年二月に鹿児島を発した西郷隆盛軍が、熊本鎮台との戦いの後豊後に侵入、豊後国と日向國の国境附近の梓峠、陸地峠、黒土峠、津島畑、松尾山、三河内、蛇葛山などの戦場で戦い戦没した官軍兵士のお墓(招魂所)です。明治十一年九月に埋葬され建立された

場所です。現在は東九州高速道路佐伯インターにつながる道路が側を通っています。



西南戦争墓地—佐伯招魂所

国木田独歩が佐伯に滞在した頃には、まだ周辺に多くの樹木が生い茂り、鬱蒼とした薄暗い神秘的な雰囲気醸し出していたと思われれます。

この岡の谷招魂所の上部には、陸軍大将式品大勲位熾仁親王の題額を掲げた「敵愾の碑」が建てられています。碑文は正六位勲四等秋月新太郎が選併書のもので、その碑文を紹介します。

明治十年の役、賊、肥薩の野に連敗し、睿蹙路を日向に取り、豊後の南境に出ず。官兵八隊これを撃つ。その用兵の地は概ねみな險峰深谷にして、大箆老樹相間つ。故を以て巧守進退、意の如く能わざるなり。

八隊の士卒戦死する者百四十余人。賊、遂にその勢いを失い以て殲滅せらるるに至れり。嗟呼、死者の功は永く山川とともに朽ちざるなり。その隊号姓名は即ち、墓碣の記す所の如し。頃、某某相謀り、その埋骨の処、佐伯村 岡の谷に就き碑を建てこれを表し、余に銘を徴す。余の旧籍は佐伯なりしを以て誼として辞すべからざるなり。

銘に曰く、

豊日の界、賊徒猖獗す。官軍防戦し、雷撃電撃す。敵王の愾は争うて、鮮血を踏み、死を視ること焔するが如し。何ぞその壮烈なる。洵に美しき岡ノ谷、爰に忠骨を埋む  
生気千載、凜乎として滅せず。

明治十九年五月

正六位勲四等 秋月新太郎撰併書

この岡の谷招魂所に祀られた人々は、殆どが東北北陸から警察官として従軍した人々である。官軍の兵士は、この岡の谷招魂所を始め、大分の護国神社等に祀られている。賊軍となった西郷軍の戦死者のお墓は殆ど存在していない。残念なことである。

今回の初歩きは、この四ヶ所を訪問した。

国木田独歩は、この他にも多くの地域を訪問し、時には尺間山から上浦の彦嶽まで縦走している。

これらの自然の雰囲気、登場人物を後日小説にして発行している。佐伯を知る一つの物語として鑑賞し、歴史的事実と結びつけながら考えると面白い。